

『琉歌百控』における形容詞

高橋俊三

はじめに

笑古本「琉歌百控」(以下「百控」と省略)は、「乾柔節流」「独節流」「覽節流」の三部より成り立っている。「乾柔節流」は一九四首の琉歌が書かれていて、末尾に「大清乾隆六十年(一七九五年、筆者注以下同じ)乙卯正月十日撰写より書」の識語がある。「独節流」は二〇三首の琉歌が書かれていて、末尾に「嘉慶三年(一七九八年)戊午五月五日」の識語がある。「覽節流」は二〇五首の琉歌が書かれていて、末尾に「嘉慶七年(一八〇二年)壬戌霜月朔日」の識語がある。古さの点からも量の点からも貴重な資料である。すでに、外間守善氏は「沖繩形容詞の史的変遷」(『現代言語学』所収)で、この「百控」の形容詞の要点を通史的に述べておられる。拙論では、この「百控」に限定してやや詳しく形容詞の用法を明きらかにしてみた。

一、普通の形容詞の用法

初めに普通の形容詞を取扱い、次に、動詞連用形に接続し、「〜したい」・「〜しにくい」の意味をつくる補助形容詞と言うべき、あるいは、形容詞から転成した接尾辞と言うべき、ブシヤ・グリシ

注①
ヤを取扱う。

一の一 終止法

琉歌のような抒情歌において、形容詞で文を終止している場合、全てなほどうかの詠嘆の情緒があるのであるが、詠嘆を表わす助詞や接尾辞などのついてないものは、便宜上全て終止法とする。他方、助詞や接尾辞のついていないものは詠嘆法とする。

① 語幹十サ

最も多いのは、次のような「体言+助詞+形容詞」の型である。
注②
△44V二三月の夜雨時々よ達ぬ

苗代田の稲や色の清さ (圈点、及び傍線、筆者。以下

同じ)

これと同様に助詞が「の」のものは、「月の清さ」△140・596V、「月の美さ」△237・353・434V、「影の清さ」△303・580V、「松の美さ」△389V、「露のしきさ」△328V、「音の高さ」△268V、「夜の長さ」△516V、「夏のおつさ」△286Vがある。これらは第4句に出でくるのが特色である。また、助詞が「も」のものは「照る月も清さ」△369・479V、「月影も清さ」△592V、「月も照清さ」△21・333V、「月も照り清さ」△272V、「慶も大さ」△463Vがある。助詞が「や」のものは「取人やおほさ」△29Vの一例である。他方、次のように

体言と形容詞の間に助詞を入れないものがある。

△503▽人繁てやりうれに事寄て

頼て居る今宵他に成そな

同様のものに「寝は夢繁さ」△517▽がある。この助詞を入れない用法で頻繁に使われたものが、「色清さ」のような複合語となるのである。

二番目に多いのは「動詞（あるいは助動詞）連体形＋形容詞」の型である。

△20▽瓦屋森登て那覇港見れば

恋し釣舟のなたる清さ

下句は「恋しい釣舟の並んでいるのが美しい」という意味で複文構造をなしている。同様なものに、「庭の白菊の咲る清さ」△243▽、

「綾蝶無蔵かあの花此花吸る妬さ」△30▽、がある。また、

△387▽面て花咲ち鱸に虹引ち

嘉礼吉の御船の走か清さ

のように、動詞と形容詞の間に助詞「が」を入れた例もある。そのほか次のような「動詞連用形＋形容詞」の型もある。

△95▽恩納嶽登て押下りみりは

恩納宮童の手振清さ

この下句は「恩納（地名）の娘の手を振っているのが美しい」の意味で、同様のものに「若竹やまく結美さ」△94▽「月も照清さ」△338▽がある。（これらは複合語とみなすことも出来る。）次のように、動詞の連用形と形容詞の間に助詞を入れた例もある。

△94▽莆の若莆や笠張ての美さ

竹の若竹やまく結美さ

② 語幹＋シャ

最も多い型は、「語幹＋サ」の時と同じく「体言＋助詞＋形容詞」である。

△236▽長閑成御代の春に誘れて

はける鶯のこえのしよらしや

これと同様に助詞が「の」のものに「句の塩ら舎」△253▽、「色の塩良舎」△507▽、「音の塩良舎」△557▽（「塩良はシユラの宛字で「舎」はシャの宛字である）、「思の苦しや」△372▽、「月の恨しや」△421▽、「月の恨舎」△421▽、「歳の浦めしや」△447▽（「浦めしや」は「恨めしや」の宛字である。なおこれはラミシヤと読む）。助詞が「も」のものに「押風も涼しや」△338・369▽、「山道も苦しやてや思ぬ」△530▽がある。また、「花の匂しよらしや」△338▽のように体言と形容詞の間に助詞を入れないものもある。

次のような「動詞連体形＋形容詞」の型も多い。

△91▽弥勒世のむかし繰辰今に

御万人の間切遊ぶ嬉しや

同様なものに、「遊ぶ嬉しや」△385・431・452・591▽、「遊ぶ嬉舎」△325▽、「遊ぶ嬉砂」△500▽、「切る恨めしや」△226▽がある。なお、「砂」をシャの仮名とみなしたのは次の理由からである。①形容詞を表記した例はこれと、「可砂」△233▽（終止法の項参照）「浦切砂」△436▽（連用法の項参照）三例があるが、それらと各々、全く同じ用法の「嬉舎」△325▽、「可しや」△250▽、「浦切しや」△136▽がある。②「百控」におけるサとシャの字母を調べてみると

〔サ〕 さ(左)・佐

〔シヤ〕 之也・志也・舎

となつてゐる。その他、次のように「砂」が二例、またこれと同じ音とみなされる「紗」が一例ある。

△189 大粒豆も満作紗ん 青豆赤豆も満作砂ん 今年来年満作し

ゆて たたちゆて遊な

△396 濁水澄ち清水に成砂井

桃原の色や染てあもの

『百控』の中には、動詞の同じ用法は見当らない。やや時代が下るがB・Jベッテルハイムの『琉球語及び日本語の文法の要綱』(一八四九年)で「する」の直接法の所に、

praeter, shang, shutang, 'dit'

と記している。また、B・Hチェンバレンの『琉球語文典及び語彙』

(一八九五年)でも「する」の半過去に shang という形を記している。従つて、「紗ん」「砂ん」「砂井」はシャン・シャン・シヤホと読むべきである。

また、次のような「動詞連用形+助詞「ち」+形容詞」のものもある。

△103 名護の大兼久馬走ち喜悅

舟走ち喜戀わ浦泊

なお「喜悅」「喜嬉」は、ともに右側に「イシヤ〜」と読み仮名が付いているし、「百控」よりやや早い時期に書かれた『屋嘉比工ま工四』△59に、

ナゴノオホガネク ムマハラチイシヤウシヤウ ササヤウテハ

ヤウホランナ フネハラチイシヤウシヤウ ワウラドマイ ササ

とあるので、イシヤウシヤウを表記したものと考えられる。

特別なものとしては、「動詞未然形+わん+形容詞」の型がある。

△184 中辺飛鳥や聞わんよたしや

かくり思さとか聞はきやしゆか

この例からして、次の「可しや」「可砂」はヨクシヤの宛字であろう。

△250 譬ひよそ列て遊はわん可しや

句へともよそに移ち異な

△233 波風や荒て通らわん可砂

港替そなよ真織取す

一の二、反語法

次の一例だけである。

△175 寄て来は寄て来退は退け

我等宮童のぬ鬨舎か

一の三、連体法

① 語幹十キ

今日の首里の口語にはこれに対応する形はない。多分、本土の用法を借入したものであろう。列挙すれば、「道広き御代」△194・281、
233 、「果無き鳥心」△180 、「果無き浜千鳥」△181 である。

② いわゆるカリ活用連体形

△297 今日の下かる目に昔友行逢て

嬉しさや互に語て遊は

この他「吉る日に」△527▽がある。「おもろさうし」から現在の方
言に至るまで、「よかる」しか出て来ない。今後検討を要する語で
ある。

③ 語幹十シ

△129▽愛し思里と満恋しゆる夜や

冬の夜の二長あち給れ

これと同様のものに「愛し里前」△308▽、「愛し思里」△129▽、「か
なし匂」△132▽、「加那志思塩良」△110▽、「加那志思無蔵」△226▽、
「しゆらし御肝」△252▽、「塩良し御肝」△342▽、「塩良し御情や」
△538▽、「塩良し小塩蘭」△552▽、「塩良し言ことば」△553▽、「塩
良し匂ひ」△584・587▽、「恋し釣舟」△20▽、「恋し夜半」△40▽、
「恋し細道」△565▽、「嬉しこと」△269▽、「嬉し事」△468▽、「淋
し夜」△516▽がある。以上の例からして、

△39▽義理や苦物あかぬ生別れ

魚の水離れかにす有らまい

の「苦物」もクルシムヌと詠むのであろう。

一の四、速用法

④ 語幹十ク

「語幹十ク」の形は今日の首里の口語においても用いられている。

列挙すれば、「深くおもてたはおれ」△25▽、「近くなゆさ」△89▽、
「近く成さ」△92・117▽、「近く成ゆさ」△519▽、「薄く成す」
△150▽、「清く織は」△181▽、「繁くあらよひや」△231▽、「近く
押詰て来は」△304▽、「暗く成さ」△314▽、「若く成さ」△336▽、

「色深くかなの染な置め」△437▽、「人繁く渡る」△502▽、「深く
馴染し袖も」△504▽である。さらに「若なられよめ」△13▽、「我
姿若成て」△35▽、「遠踏迷て」△445▽も同様と考えられる。なお、

△586▽稀の御行逢更め甘く片時も

起れく／＼里前語らひ欲の

の「甘く」は外間守善氏は形容詞としているが、伊波普猷^註の「副詞、
またたく間」という説に従っておく。

⑤ 語幹十シク

この形は見当らない。(今日の首里の方言では使っている。)

⑥ 語幹十サ

△101▽伊集の木の花やあか清さ咲ひ

予ん伊集成て真白咲な

次のように「有る」に掛って行く場合は、準体法とみなせないこと
はないが、本土方言の用法とは違うので、ここでは速用法に入れる
ことにする。

△407▽道歩み指は物よ思詰て

迷る細道の多さあもの

これと同様のものに「中島の小疋繁さあもの」△53▽、「契り云言
葉の深さあてと」△359▽、「咲出たる花の色清さあれは」△412▽、

「遠さは有な」△38▽がある。なお、

△24▽笹込てをれは淋敷さあもの

押風と列て忍ていまわれ

の「淋敷さ」は一見「さびしさ」と詠むもののようにであるが、琉歌
の音数八・八・八・六に合わない。

「屋嘉比工四」△97▽に、

マセコマテヲレバ、コヽテルサアモノ　ハイヤマタハナノサト
シヤウ　オソカゼトツレテ　ハイヤマタ　シノテイモレ　ハナ
ノサトシヤウ

とあり、これに従い「ここてるさ」と読むと、音数も合い適當である。なお、以上六例中五例までが「有ル」に掛るといふかたより方をしている。このことは今日の「有りと融合した形」へ發展する兆しをみせていると言つてよからう。

④ 語幹+シ+サ

△536▽命よい増て惜さ_レ有物や

見果らぬ夢の醒て行す

の一例だけである。なお、「語幹+シ+サ」の形は、普通シのi母韻の影響でサを口蓋音化させ、それと同時に、シが脱落(音融合)してシヤとなるのであるが、これはそのような音変化をしていない。琉歌の音数に合わせるために、変化以前の古い形(あるいは、本土から借入した形)を使つたのであろう。以下、「語幹+シ+サ」の型はすべて同じことがいえる。

⑤ 語幹+シ+ヤ

△317▽葉すれば頓て苦しや_レま_レる事も

与所の上に見中て心責れ

△495▽見欲舎浦切らしや誰かしきやる事か

恨ても茶主か我肝やれは

△136▽寸舟舟の浮る渡海やれは

見ふしや浦切しやのよてしやへか

△436▽朝間夕間通て見る自由の成は

見欲浦切砂のよて舎へか

これらは、全て「する」という語に掛っている。本土の「形容詞語幹+シ+がる」の用法が沖繩にないというすきまをこの形が補つていることになる。

一の五、準体法

① 語幹+サ+ス

次の一例のみである。なお、この「す」は準体助詞である。

△57▽長すやあまていんちやさやたらぬ

中寸の 一かね肝の寸法

② 語幹+サ

△248▽詠てもあかぬ咲梅の美さ

鶯に成て朝夕吸な

の他、「道路の清さ世の中の盛り」△422▽、「引は音高き鈴の車」△465▽、「若舎淋さ語らい欲舎の」△392▽がある。なお、△392▽の「淋さ」をサビシサと読むと琉歌の音数に足りないので、前述した△241▽の「淋敷さ」と同様にココテルサと読むのが適當であらう。また、次のように係助詞(他との区別を表わす)ヤが付いた例もある。

△117▽港清さや湖平底みなと

泊清さや那覇の泊

△57▽長すやあまていんちやさやたらぬ

中寸の 一かね肝の寸法

次の「面難や」は以上の例からしてツレナサヤと読むのが適當であらう。

△319▽誰よ恨とて鳴か浜千鳥

逢ぬ面難や。我身も供に

これに準じて、次の「面難に」もツレナサニと読むのであろうか。

△259▽一期面難に。馴し身よ思て

恋死は報い誰に行か

同様のものに「一期面難に」△294▽、「醒る面難に」△540▽がある。

③ 語幹十シヤ

△242▽笹内の苦しやおもへ知り召ち

風の音便や聞き給れ

また、次のように係助詞（他との区別を示す）ヤの付いた例もある。

△296▽今日の誇らしや。猶にきやな立る

蒼てをるはなの露ちやたこと

△455▽嬉しや誇しや。懐に余て

袖迄も包む無蔵か情

④ 語幹十シ十サ

△461▽淋さに任ち知ぬ歌摺は

与所の物笑いのわ伽なけさ

一の五、並列法

同じ語（特に活用語）を二語連ねる方法をここで並列法と名付けておく。

△392▽濟川のことに月日押やらち

苦舎淋さ語らい欲舎の

△455▽嬉しや誇しやや懐に余て

袖迄も包む無蔵か情

ともに二つ目の形容詞は単体法で使われているという条件のもとで、「語幹十シヤ」の形であって、いわゆる連用形でない所に注意したい。

一の六 詠嘆法

① 語幹十サ十ノ

△157▽富里から下て夜更らち来は

腰押風の身冷るさの。

の一例のみである。（これと同じ形で後に続く部分の理由・根拠などを示す用法は「百控」ではまた見当らない。次の②の場合も同じ。）

② 語幹十シヤ十ノ

△423▽思無蔵と列て行欲とあすか

儘成ぬ事の「百恨しや」の一例のみである。

③ 語幹十サ十ヤ

確かな例は見当らない。ただし、

△424▽面難や。我身の人に生れとて

親と子の道の与所に違て

や△425▽・△449▽・△554▽・△555▽などの「面難や」、及び、

△563▽彼と詠たる月や又あらぬ

見れば假顔や袖と濡て

の「假顔や」はツレナサヤと読むのであろう。

④ 語幹+シ+サ+ヤ

「嬉し」の例で確かなものは、

△298 √嬉しさや庭の竹の節〜に

君か万代の祝ひ籠て

の外「昔友行逢て嬉しさや」△297 √、「御祝事続く御代の嬉しさや」

△336 √、「嬉しさや今宵稀の友行逢て」△454 √がある。これらの例

からして、次の二例も同様にウレシサヤと読むのであろう。

△500 √嬉しさや今度弥勒世盛に

上下も共に遊ぶ嬉砂

△501 √嬉しさや今宵云言葉の限り

語らても飽ぬ心恐れ

また、「淋し」の場合、確かなのは、

△205 √仲島の浦の冬の淋しさや

千鳥こゑに松の嵐

の一例であるが、

△465 √淋しさや今宵三味線とわ友

引は音高き鈴の車

も同様にサビシサヤと読むのであろう。「恋し」の場合は、

△571 √馴し思無蔵か歌思て聖て聞は

恋しさや鳥の初音

△576 √拜て恋しさや又も拜にやへら

花盛り御側匂ひ忍て

の二例とも、読み方がはっきりしている。

⑤ 形容詞語幹+シ+ヤ

「恨めし」の場合は、

△274 √便り有物と文や長ん持そ

恨みしや恋路自由も成ぬ

の他、「仲島の小碓渡で恨しや」△456 √、「会者定離の慣へ知ぬ恨

しや」△216 √、「恨しや恋路わ鯛の儘成ぬ」△294 √、「恨しや無蔵

か」△295 √がある。これらをウラミシヤと読むと琉歌の音数に合わ

ないので、ウラミシヤと読むに違いない。また次の「恥しや」も、

同じ理由でハツカシヤと読むに違いない。

△373 √夢に起されて覚す戸は明て

月に恥しやわ身の心

二、接尾辞的ブシヤ・クリシヤの用法

接尾辞的(あるいは、補助形容詞的)に用いられたブシヤ・クリ

シヤを普通の形容詞の所で述べた順に従って整理して行くことにす

る。

二の一 終止法

フシヤの場合は、

△393 √済川のこと年波や立い

繰戻ち見ほしやはなのむかし

の他「月に尋ね欲舎」△459 √、「尋やい見欲」△556 √、「出て見欲

舎」△302 √などがある。

クリシヤの場合は、

△327√袖より留て斬たい彼か

言るゝことはの忘りくりしや

の他「忘れくれしや」△517√、「歩みくりしや」△361√、「わたり

苦しや」△344√、「渡い苦舎」△569・533√、「渡い苦しや」△491√、

「磨け苦舎」△546√、「別れ苦しや」△432√、「離れ苦舎」△304√、

「定め苦しや」△496√、「定め苦舎」△585√がある。グリシヤはこ

の終止法だけしかない。しかも、それらは全て琉歌の末尾に来てい

る点と三音節動詞に接続している点が特色である。

二の二 反語法

例が見当らない。

二の三 連体法

名詞から副助詞に転成したバカリにかかる、

△160√富里屋の後に田畠のあとて

原の行戻ひ見欲計い

△435√押風に靡く庭の糸柳

姿た色清さ見欲計り

の二例のみである。二例とも漢字一字で書かれていて、ホシと読む

べきかホシヤと読むべきか決めがたい。

二の四 連用法

フシヤと読む確かな例としては、

△150√哀焚見ても見ふしやある花の

春過て句の薄く成す

の他、「遊欲舎あても」△354√、「排み欲舎あても」△574√、「見

欲舎有と」△544√がある。これに準ずると思われる例に、

△134√勝連の嶋や通ひ欲あすか

和仁屋門の潮の蹴い厭て

と「渡欲あらは」△346√がある。

また「欲」と用言の間に係助詞「と」を入れる次のような形もあ

る。

△114√大田名の嫁やないふしやとあすか

石あら朝道の踏の厭て

△423√思無蔵と列て行欲とあすか

儘成ぬ事の百恨しやの

△114√の例からして△423√の「欲」もフシヤと読むのが適當である

う。また、「欲」と用言の間に、係助詞「や」を入れる次のような

型もある。

△133√伊計離嫁や成欲やあすか

大那川の水の汲の厭て

△158√我富里島や水欲や無らぬ

池小堀好て横ち置ん

これらの「欲」も、他の連用法に準じてフシヤと読んでよかるうか。

二の五 準体法

例が見当らない。

二の六 並列法

確かな例は、

△136 √ 寸舟樽舟の浮る渡海やれば

見ふしや浦切しやのよてしやへか

と「見欲舎浦切らしや誰かしきやる事か」△495 √ の二例であるが、

△436 √ 朝間夕間通て見る自由の成は

見欲浦切砂のよて舎へか

の「欲」も同じ用法なので、フシヤと読むのであろう。

二の七 詠嘆法

① 語幹ナシヤナノ

△174 √ 一年に一夜天の河渡る

星のこと契て語らへほしやの。

などの他、「知しほしやの」△483 √、「遊ひほしやの」△182 √、「拝

み欲舎の」△482・588 √、「拝み欲舎ぬ」△330 √、「語らい欲舎の」

△392 √、「詠欲舎の」△592 √ などがある。これらの例からして、

△116 √ 月の影てやんす袖に宿借い

しはし宿めしよわれ語らい欲の。

や「語らひ欲の」△586 √ の「欲の」もフシヤヌと読むべきであろう。

なお、これらは全て琉歌の末尾に来ている点と、三音節動詞に接続

している点が特色である。

② 欲十ヤ

詠嘆の終助詞ヤが付いた例は、

△232 √ 逢ぬ先今にくなひやい見れば

連も成欲や逢ぬむかし

の一例である。「欲や」はフシヤヤと読むのかフシヤと読むのか不明である。

三、読み方・用法に問題があるもの

① 「慶喜」「喜悅」

△402 √ 道路の清き世の中の盛り

余多御万人も寄て慶喜

の「慶喜」はこれだけを見た場合、形容詞と認定して、ウリシヤ（あるいはイシヨシヤ。終止法の項参照）と読んでも良からう。しかし、

△460 √ 稻の穂や真積麦の穂や茹よれ

夏と二三月や慶喜誇る

△282 √ 道広き御代や四方の御万人も

歌謡て遊て喜悅誇り

の「慶喜」「喜悅」は、その下に「誇り」「誇い」がある。この「誇り」「誇い」は判然としないが、動詞「誇る」（意味は「喜ぶ」）の連用形、あるいは、動詞から転成した名詞という可能性がある。もしそうだとすると、「慶喜」「喜悅」は、同じく動詞から転成した語で、しばしば「誇り」の対語に使われる「あまえ」を表記したものと考えられる。以上のことから、これらの読み、及び品詞は、いましばらく保留しておく。また「慶も大さ」△468 √ もほぼ同じ理由で保留しておく。

② 「面難」

「面難」をツレナサと読んでさしつかえない場合もある（華休法・

詠嘆法の項参照)が、

△365 V 時の間に散る頼覧花に

心通合さ縁の面難

△379 V 音に聞恋に思ひ焦とて

拜て振別る縁の面難

△520 V 絵に写ち置は佛や有か

物言葉の無らぬ面難

の「面難」はツレナサと読むと、琉歌の音数に合わない。また、

△293 V 只にや長も面難朝ま夕聞暮ち

詰て淋さや雨の音声

△448 V 独り打向て空よ咎れは

面難佛や月に尽ぬ

の「面難」もツレナサと読むと琉歌の音数に合わない。「琉歌全集」

は△365・379・520 V をツラサ、△293・448 V をツレナと読んでいるが、

今後の研究を待ちたい。

⑧ 「嬉し」

△299 V 嬉しなる竹のよゝの数々に

籠る万代や君と知ら

の「嬉し」は、終止法らしいのであるが、落着きが悪い。また、「語

幹ナシ」の型の終止法はこれのみである。しばらく、保留にしてお

きたい。

むすび

総括すると次のようなことが「百控」の重要な特徴となるう。

(一) サ系形容詞(「語幹ナサ」型の形容詞)とシヤ系形容詞(「語幹ナシヤ」型あるいは「語幹ナシヤ」型の形容詞)とは明確に区別されている。本土に対応語がある場合、前者は本土のク活用形容詞に、後者は本土のシク活用形容詞に対応する。「沖組語辞典」と比較すると、「百控」のウラキラシヤに対して、同辞典で *UraKiraa* となっている一例だけが相違している。

(二) 「有り」と音の融合した例はない。

(三) 連体法は、サ系形容詞の場合「語幹ナキ」の型であるのに、シヤ系形容詞の場合「語幹ナシ」の型である。すなわち「語幹ナシナキ」の型がない。

(四) 詠嘆法は、サ系形容詞の場合「語幹ナサナヤ」の型であるのに、シヤ系形容詞の場合「語幹ナシナヤ」の型である。すなわち「語幹ナシナヤ」の確かな例がない。これは例が少ないせいによる偶然のような感じがしないでもない。しかし、「琉歌全集」(一九六八年)の中には「語幹ナシナヤ」型の詠嘆法が「なつかしやや」△275・487・713・2111・2291・2329・2362・2781・2879 V と、接尾辭的な「くぼしやや」△1097・1118・2173 V の二語十二例あるが、それと「古今琉歌集」(一八九五年)の中の同じ琉歌を比較すると、各々、「なつかしや」△328・1156・529・1083・1034・1259・1516・1578・1303 V 「くぼしやや」△285・353・454 V となっている。また、「琉歌全集」の△1393 V の歌詞は「恥かしや我身の心」とあるが、方言表記は「ハツイカシヤヤ」となっている。これらのことは、「語幹ナシナヤ」という準体法の型が、接尾辭の「くぼしやや」の方から、次第に詠嘆法の機能を持つようになりつつあることを示唆しているのではなかるうか。

最後に、以上の特徴をもとにして若干の語の読み方を検討してみよう。

① 「愛藝」「哀藝」

△588 √ 忍ぶ路の昔今思て見れば

愛藝と多さ忍ふ心

この「愛藝」は本土の節用集などをまねて「なつかし」を表記したものと思われる。これは本土のク活用形容詞に対応し、用法は準体法なので、ナツカサでもなく、ナツカシでもなく、ナツカシヤと読むのが隠当である。

△150 √ 哀藝見ても見ふしやある花の

春過て匂の薄く成す

この「哀藝」は先の「愛藝」を沖繩的に改めたものと考えられる。なぜなら、今日の首里方言のナチカシヤンは「悲しい」に近い意味だからである。そして、この用法は終止法か詠嘆法なので、ナツカシヤかナツカシヤと読むのが良い。(笑古本では横にナツカシヤと読み仮名が付いている。) 琉歌の音数からするとナツカシヤが隠当であろう。

② 「浅猿」「浅増」

△42 √ 浅猿や浮世人の上も知ぬ

我身や此世界に一期思て

△314 √ 浅増や浮世石の火の光

あかかよんとめは暗く成さ

△315 √ 浅増や人の花染の心

知らん徒におもひ染て

の「浅猿」「浅増」も本土の表記法をまねて「あさまし」を表記したと思われる。これは本土のシク活用形容詞に対応し、用法は詠嘆法なので、アサマシヤと読むのが隠当である。

注① 片仮名は当時の音価を推定したものでなく、「百控」で種々の表記をしているものを一つで代表させるためと、シヤカシヤ

かをはつきりさせるためのものである。

注② 『庶民生活資料集成』第一九卷南島篇の番号に従う。

注③ 注②の資料では、「砂」を「サ」と翻刻している。

注④ 池宮正治氏「屋嘉比工工四」所出琉歌集」「琉球大学沖繩文化研究所紀要」創刊号所収)による。

注⑤ 『琉球戯曲辞典』(伊波普猷全集)第八卷所収)

注⑥ 鳥袋盛敏・翁長年郎著『琉歌全集』では「さびしさも」としている。

注⑦ 国立国語研究所編『沖繩語辞典』

注⑧ 東京教育大学図書館蔵 小那覇朝編『古今琉歌集』

(沖繩国際大学助教)